

源氏物語

蜻蛉卷

与謝野晶子訳



源氏物語

蜻蛉

紫式部

與謝野晶子訳

ひと時は目に見しものをかげろふのあ
るかなきかを知らぬはかなき（晶子）

宇治の山荘では浮舟うきふねの姫君の姿のなくなつたことに驚き、いろいろ
と捜し求めるのに努めたが、何のかいもなかった。小説の中の姫君が
人に盗まれた翌朝のようであつて、このいたましい騒ぎはくわしく書

くことができない。

京からの前日の使いが泊まって帰らなかったため、母夫人は不安がつてまた次の使いをよこした。まだ鶏の鳴いているころに出立たせたと云っている使いにどうこの始末を書いて帰したものであるかと、乳母めのとをはじめとして女房たちは頭を混乱させていた。何のわけでどうなったかと推理してゆくことができずに、ただ騒いでいる時、浮舟の秘密に関与していた右近うこんと侍従だけには最近の姫君の悲しみよう、煩悶もんのしよの並み並みでなかったことから、川へ身を投げたという想像がついたのであった。泣く泣く夫人の送ってきた手紙をあけて見ると、

あまりにあなたが心配で安眠のできないせいでしょうか、今夜は夢

の中であなたを見ることすらよくできないのです。眠ったかと思うと何かに襲われて苦しむのです。そんなことで気分もよろしくなくて困ります。移転される日の近くなったことは知っていますが、それまでの間をこの家へあなたを来させていたく思います。今日は雨になりそうですからだめでしょうが。

と書かれてあった。昨夜浮舟の書いた返事もあけて読みながら右近は非常に泣いた。こんな覚悟をしておいになったので心細いようなことをお言いになったのである、小さい時から少しの隔てもなく親しみ合った主従ではないか、隠し事は塵^{ちり}ほどもなかった間柄ではないか、それだのに最後に自分をおうとみになり自殺^けの気ぶりもお見せにならなかったのは恨めしいと思うと、泣いても泣いても足らず足摺^{あしず}り

ということをしてもらっているのが子供のようであった。悲しんでいたことにはよく気はついていたのであるが、自殺などという恐ろしいことの決行できる方とは見えず、優しい柔らかい心の持ち主だったではないかと、まだ事実を事実として信じることができずにただ悲しいばかりの右近であった。乳母はかえってはげしい驚きのために放心して、

「どうすればいいだろう、どうすれば」

とばかり言っているのである。

ひょうぎよう

兵部卿の宮も普通でない気配けはいのある返事をお読みになったため、ど

んなふうな気になっているのであろう、自分を愛していることは確かであるが、移り気であると自分の言われていることに疑いを持ってい

たから、大将の手へ行くのではなくどこともなく行くえをくらまそうとするのではあるまいか、と不安でならずお思いになつて使いをお出しになつた。

使いが来てみると家の中は女の泣き叫ぶ声に満ちていてお手紙を受け取ろうとする者もない。どうしたのかと下の女中しもに聞くと、

「姫君が昨晚にわかにお亡れかくになりましたので、女房がたはだれも氣を失つたようになっていらつしやるのですよ。御用をお取り次ぎしましてもだめでしょう」

と言つた。何の事情も知らぬ男であつたから、くわしく聞くこともせずに歸つてまいつた。そして山莊の出来事を取り次ぎによつておしらせしたのであつた。宮は夢とよりお思われにならない。ひどく病を

しているというふうでもなく、いつも気分がすぐれぬとは書いてあつたが、昨日きのうの返事にはそれも書かず、平生のものよりも情の見えることを言つて来たではないかと不思議にばかりお思われになつて、時方ときかたに自身で宇治へ行き確かなことを調べて来るようにお命じになつた。

「あの大將のお耳にどんなことがはいつたのですか、宿直とのいをする者が忠実に役を勤めないというお叱りしかがあつたとかで、私の侍が使いにまいったり、帰つたりいたしますのさえ、見つけますと調べ立てるようなことをする者があるそうなので、口実なしに私が行きまして、それが大將さんへ知れますとあなた様の御迷惑になることが起るのではございませんでしょうか。そしてまた人が急病でお死になつた所などというものはおおぜいの人が集まってもいるでしょうか

ら」

「だからといって、訳のわからぬままにしておけるものではない。何とか口実を作って行って、こちらの味方になっている侍従などに逢^あつて、真相を確かめて来てくれ。どんなことをこういうふうに言っているかをね。下人というものはよくまちがったことを聞いて来たりするものだから」

こう仰せられる宮の御様子においたましいところの見えるのももつたいなくて時方はその夕方から宇治へ出かけた。この人たちが急いで行けば早く行き着くこともできるのであった。少し降っていた雨はやんだが泥^ぬ凪^{かるみ}の路^{みち}につかれていたし、はじめから侍風に装っていたのであるし、目だつこともなく門をはいることのできた山荘の中は混雑し

ていた。今夜のうちに葬儀をしてしまうのであるなどと皆の言っているのを聞いて時方はひどく驚かされた。右近に面会を求めたが逢えない。

「何が何やらわからぬふうになっていまして、起き上がる力もないのです。夜分おそくにでもなりましたらおいでくださいませ。お目にかれませんのは残念でございます」

と取り次ぎをもつて言わせた。

「そうではありましようが、こちらの御事情がわからぬままでは帰るようがありません。もう一人の方にでも逢わせてください」

時方がせつに言ったために侍従が出て来た。

「とんだことになりました、だれも想像のできませんようなふうでお

亡^なくなりになったものですから、悲しいなどと申す言葉では私どもの心持ちは出てまいりません。夢のように思ひまして、だれも皆^{ぼうぜん}呆然としておりますとだけ申し上げてくださいませ。少しこうしました気持ちの納りますころになれば、その前にどんなに煩悶をしておいでになりましたかと申すことや、あの宮様のおいであそばした晩に心苦しく思召^{おぼしめ}した御様子などもお話し申し上げることができるかと思ひます。触穢^{しよくえ}の期間の過ぎました時分にもう一度またお立ち寄りください」
と言つて侍従ははげしく泣く。奥のほうにも泣き声が幾いろにも聞こえて、乳母らしく思われる声で、

「お姫様どこへいらつしやいました。帰つておいでくださいませ。御遺骸^{いがい}さえ見られませんかとはなんたる悲しいことでしょう。毎日毎日拝

見しても飽くことのないあなた様でした。そのあなた様の御幸福におなりになるのを祈りますことで生きがいのある私ではございませんか、それにあなた様は打ちやってお行きになりました、どこへ行ったとも知らせてくだらない。鬼神でもあなた様を取り込めてしまうことはできないはずです。人が非常に惜しむ人は帝釈天たいしゃくてんも返してくださいるものです。お姫様を取ったのは人にもせよ鬼にもせよ返しに来てください。御遺骸だけでも見せてほしい」

こう叫んでいるうちに不審な点のあるのに気のついた時方は、「真相を知らせてください。だれかがお隠しになったのですか。確かに知りたく思召して、御自身の代わりにおよこしになった私は使います。今ははっきりしないままでも事は済むでしょうがあとでほんとう

のことがお耳にはいった節、御報告が違っていたものでしたら使いの罪になります。まただれだれに逢えと、御好意を持つものと思召して御名ざしになったのに対しても相済まぬこととお思ひになりませんか。一人の女性に傾倒される方は外国の歴史などにもありますが、宮様のあの方への御熱愛ほどのものはこの世にもう一つとはないと私は拝見しているのです」

と言った。道理なことで、この場合の宮の御感情はさこそと恐察される、隠しても姫君の普通の死でない噂は立つことであろうから、今申し上げておくほうがよいと侍従は思い、

「だれかがお隠ししたかという疑いも起こることでしたなら、こんなふうに家じゅうの人が悲しみにおぼれることもないでしょう。お悲し

みになってめいったふうになっていらっしやいましたところに、殿様のほうから少しめんどうなふうの仰せがあつたのです。お母様である方も、あのわめいております乳母なども初めからの方へ迎えられておいでになりますことの用意に夢中でしたし、宮様のお志に感激しておいでになりました姫君の思召しはまた別でしたから、それでお頭が混乱してしまったのでしよう、思いも寄らぬことになりました心身ともに失っておしまいになつたので、あの乳母のようなむちやな叫びもされるのですよ」

さすがに正面から言おうとはせずにはのめかしていることのあるのを内記も知った。

「それではまたお静かになつてから改めて伺いましょう。立ちながら

の話にしてはあまりに失礼なことになります。そのうち宮様御自身でもおいでになることになりましょう」

「もつたいない、それはいけません。今になりました。いっさいの秘密の暴露してしまいますことは、お亡^なくなりになりました方のためにあるいは光栄なことかも知じませんが、十分隠したく思召したことです。から、秘密は秘密のままにしてお置きくださいますほうが御好志になります」

などと侍従は言い、姫君の最後が普通の死でないことをほかへ洩^もらすまいとしても、自然に事実として人が悟ってしまうことであろうと思い、こんな会談を長くしていることも避けねばならぬと思う心から時方を促して去らしめた。

雨の降る最中に常陸夫人ひたちが来た。遺骸があつての死は悲しいといつても無常の世にいては、どれほど愛していた人でもある時は甘んじて受けなければならぬのが人生おきての掟であるが、これは何とも思ひあきらめてよいことかと悲しがった。苦しい恋の結末をそうしてつけたことなどは想像のできぬことで、身を投げたなどとは思ひ寄ることもできず、鬼が食ってしまったか、狐きつねというようなものが取つて行つたのであろうか、昔の怪奇な小説にはそんなこともあるがと夫人は思うのであつた。また常に恐れている大将の正妻の宮の周囲に性質の悪い乳母というような者がいて、薫かおるが浮舟をここへ隠して置いてあることを知り、だまして人につれ出させるようなことがあつたのではあるまいかと、召使いに疑いをかけて、

「近ごろ来た女房で氣心の知れなかったのがいましたか」

と問うた。

「そんなのはあまりにこちらが寂しいと申していやがりまして、辛抱しんぼうもできませんで、京へお移りになればすぐにまいりますというような挨拶あいさつをしまして、仕事などだけを引き受けて持つて帰ったりしまして、現在ここにいるのはございません」

答えはこうであつた。もとからいた女房も実家へ行つていたりして人数は少ない時だったのである。侍従などはそれまでの姫君の煩悶を知つていて、死んでしまいたいと言つて泣き入つていたことを思い、書いておいたものを読んで「なきかげに」という歌も硯すずりの下にあつたのを見つけては、騒がしい響きを立てる宇治川が姫君を呑のんでしまつ

たかと、恐ろしいものとしてそのほうが見られるのであった。ともかくも死んでおしまいになった人が、どこへだれに誘拐ゆうかいされて行っているかというように疑われているのは気の毒なことであると右近と話し合い、あの秘密の関係も自発的に招いた過失ではないのであるから、親である人に死後に知られても姫君として多く恥じるところもないのであると言ひ、ありのままに話して、五里霧中に迷っているような心境をだけでも救いたいと夫人を思い、また故人も遺骸を始末するのが世の常の営みなのであるから、そのまま空で悲しんでばかりいることをしては日が重なるにしたがい秘密は早く世の中へ知られてしまうことでもある、その体裁も相談して作るほうがよい、どうしても眞実を母夫人に知らす必要があるとして、ひそかに兵部卿の宮との関

係、そのうち大将に秘密を悟られて姫君が煩悶した話をするのであつたが、語る人も魂が消えるようになり、聞く人もさらに予期せぬ悲哀の落ち重なつてきたふためきをどうすることもできないふうであつた。それではこの荒い川へ身を投げて死んだのかと思うと、母の夫人は自身もそこへはいつてしまいたい氣を覺えた。流れて行つたほうを捜させて遺骸だけでも丁寧に納めたいと夫人は言いだしたが、もう大海へ押し流されたに違いない、効果は収めることができずに人の噂だけが高くなることははばからなければならぬことを二人は忠告した。どうすればよいかと思うと胸がせき上がつてくる氣のする常陸夫人は、どうと定めることもできずに茫^{ぼう}としているのを二人がたすけて、車を寄せさせて姫君の常に坐^ざしていた敷き物、身近に置いた手道具、

もぬけになっていた夜具などを入れ、乳母の子の僧と、その叔父おじにあたる阿闍梨あじやり、そのまた親しい弟子でし、もとから心安い老僧などで忌中こもを籠こもろうとして来ていた人たちなどだけに真実のことを知らせ遺骸まろのあつてする葬式のように繕しゆとわせて出す時、乳母は悲しがって泣き転まろんだ。宇治の五位、その舅しゅうとの内舎人うちとねりなどという以前に嚇おどしに來た人たちが來て、

「お葬式のことは殿様と御相談なすつてから、日どりもきめてりつぱになさるのがよろしいでしょう」

などと言っていたが、

「どうしても今夜のうちにしたい理由わけがあるので、目だたぬようにと思う理由もあるのでです」

と言ひ、その車を川向かいの山の前の原へやり、人も近くは寄せずに、真実のことを知らせてある僧たちだけを立ち合わせて焼いてしまった。火は長くも燃えていなかった。田舎いなかの人はこうした作法はかえって都人より大事にするもので、そしてこの場合の縁起を言ったりすることもあるさいほどにするものであったから、大家の夫人の葬儀とも思われぬ貧弱な式であつたと譏そしる人があつたり、また側室であつた人の場合はこんなふうにして済まされるのが京の風俗であるなどと言つたり、いずれにもせようれしくない取り沙汰ざたを人はした。そうした階級の人がどう思つたかということさえもつつましいこの場合に、大將が遺骸も残さず死んだと聞いては必ずどこかへ失踪しつそうをしてしまつたことと疑うであらうし、親族関係の濃い宮様のほうへその話の伝

わってゆかぬはずもない、その時に宮がお隠しになったと大將は思うまい、どんな人が隠しているかと思ひ想像もされるに違ひない、生きていた間は高い貴人たちに愛される運命を持った人が、死後に醜い疑いをかけられるのはもつてのほかであると女房らは思ひ、山莊の中の下人たちにも今朝姫君の姿の見えなかつた騒ぎに、思わずも真相を悟らせることになった者らへは口堅めを嚴重にし、知らなかつたのにはあくまでも普通の死であつたように取り繕うことに侍従と右近は骨を折つた。時間がたつたのちには浮舟の姫君が死を決意するまでの経過を宮へも大將へもお話しすることができようが、今は興ざめさせるような死に方を人の口から次へ次へと聞こえることは故人のために気の毒であると思ひ、この二人が自身らの責任を感じる心から深く隠すこ

とに努めた。

この時に薫は母宮が御病氣におなりになつて石山寺へ参籠さんろうをあそばされるのに従つて行つていて騒がしく暮らしていたのであつた。京よりもまだ遠くにいて宇治のことが気がかりでならぬ薫でもあつたが、はかばかしく消息をする人もなかつたために、葬儀にも大将家の使いの立ち合わなかつたのは山莊の人々の情けなく思うところであつたが、莊園の人が石山へ行つてはじめて姫君の死は薫へ報じられたのであつた。使いはその翌日の早朝に宇治へ来た。

非常なことの起こつたしらせを受け、すぐにも自分で行くべきですが、母宮の御病氣のために日数をきめて籠こもつてゐるために、それも実行ができません、昨夜にもう葬送を行なつたということですが、

なぜそれは私へ相談をしませんでしたか、そして日を延べるのが普通ではありませんか。しかも簡単に儀式をしてしまったと聞いて残念に思います。どうしても同じことですが、一人の人間の最後の式ですから、田舎いなかの人たちの譏そしりを受けたりすることになつては、自分のためにも迷惑です。

と、あの親しく思っている大蔵大輔たゆうを使いにして言わせたのであつた。使いの来たことでまた悲しみが新しくなつたし、答える言葉も何と言つてよいかわからぬ時であつてみれば、人々は泣くのを挨拶あいさつに代えて何とも申し出すことはできなかつた。

薫は思いがけぬ愛人の死に落胆をして、情けない場所である、幽鬼などが住んでいてそうした災厄さいやくをしばしば起こすのでなからうか、そ

れと気もつかずにどうして長く宇治などへ置いていたのだろう、不快な関係がほかに結ばれたらしいことなども、ああした不用心な所へ住ませておいたために隙を^{すき}うかがわせることになったに違いない、と思われるのも皆自分の非常識に原因したことでであると胸が痛くなるほどにも悔まれた。御病気で専念に仏へ祈っておいでになる母宮のおそばでこんな煩悶^{はんもん}をしているのはよろしくないと思い薫は京の邸^{やしき}へ帰った。夫人の宮のところへは行かずに、

「たいしたことではないのですが、身辺に不幸が起こったものですか、しばらく落ち着きますまで、縁起の悪いことにもなりますから謹慎していようと思います」

などと御挨拶をしておいて、一人で人生の深い悲しみを味わってい

うきふね

あいきよう

た。浮舟の容姿の愛嬌があつて、美しかったことなどを思い出すと、非常に恋しくなり、悲しくなる薫は、その人の生きていた時には、それをそうと認めようとはせず、たびたび逢いに行こうともせず、寂しい思いばかりをさせて来たのであろうと思う後悔があとからあとからわいてくる。恋愛について物思いの絶えない宿命をになつてゐる自分である、信仰生活を志していながら俗から離れずにゐるのを仏が憎んでおいでになるのであろうか、悟らせようとしての方便には未来の慈悲を隠してこんな残酷な目も仏はお見せになるものであると、思い続けて仏勤めをばかりしていた。

浮舟をお失いになつた兵部卿の宮は、まして二、三日は失心したやうになつておいでになつたため、どうした物怪が憑いたかと周囲の人

もののけ

つ

たちが騒いでいるうちに、ようやく涙が流れ尽くしてお心が静まってきたと同時に、生きていた日の浮舟が恋しくばかり思い出されになるのであった。他人には重く病気をしているふうを見せて、亡^なき恋人を思う悲歎に沈んでいることは知らせないものであると、御自身では思召したが、自然御様子にそれが現われるものであるから、どんなことにお出逢いになって、こんなに命もあぶないまでに悲しんでおいでになるのであろうという人もあるために、大将もそれを知り、故人とは自分の想像したような関係を作っておいでになったらしい、手紙をおやりになったりするだけのことでないのであった、宮が御覧になれば必ず深い愛着をお覚えになるはずの人であつた、生きていたならば自分は裏切られた男としての醜名を取らなければならぬので

あつたと、こう思うようになってからは少し故人へのあこがれがさめた気のする薫であつた。

兵部卿の宮の御病氣見舞いに伺候せぬ人もなく、世間の騒ぎにもなっている場合であるのに、たいした喪というわけでもないのに、自分がお見舞いにならないのも僻見をいだいているように見られることであろうからと思い、薫は二条の院へ伺つた。この時分に式部卿しきぶきやうの宮と言われておいでになつた親王もお薨かくれになつたので、薫は父方の叔父おの喪に薄鈍色うすにびの喪服を着けているのも、心の中では亡き愛人への志にもなる似合わしいことであると思つていた。顔は少し瘦やせていよいよ艶えんに見えた。お見舞い客が皆去つたあとの静かな夕方であつた。

宮は御病氣らしくお見えにはなつても、ただお気持ち重く沈んで

しかたがないという御状態にすぎないのであつたから、うとうとしい人とは御面会にならぬが、お居間の中へ平生はお通しになる御親交のある人たちとはお逢いになるのであつたから、薫を御引見になつたが、その人の顔を御覧になると理由もなく恥ずかしくお思われになり、心弱くなつておいでになるのが隠しきれぬような涙になつて出るのをきまり悪く思召しながらも、よく心持ちをお抑えおさになり、

「たいした病氣ではありませんが、だれもが悪くなつてゆく兆候のある容体だと言つて騒ぐものですから、お上も中宮様かみ ちゅうぐうも御心配あそばされるのが苦しく思われてね。それにつけてもまた人生の心細さが感ぜられてなりませんよ」

こうお言いになり、ちよつと袖そでで押すほどに拭ぬぐうてお済ませになる

つもりでおありになった涙が、どうしたかとめどもなく流れ落ちるのを、見苦しいと思召すのであるが、浮舟のために泣くとは大将に氣のつくはずもなからう、ただ人生にめめしく執着をしていると見えるだけであろうと、薫の心中を御推測のできぬ宮は思っておいでになった。やはり恋人の死ばかりを悲しんでおいでになるのであった、いづごろからあつた事実なのであらう、自分を滑稽な男と長い間笑つておいでになったのであらうと思ひ、薫は悲しみもそれで忘れることができてゐるのを宮は御覧になり、死んだ愛人に対して非常に冷淡なものである、ものの痛切に悲しい時には全然關係のないことにさえ涙が誘われ、空を鳴いて通る鳥の声にも哀傷の思ひは催されるはずではないか、自分が何の悲しみによつて病んでゐるかを知つたなら、同情から

平気には見ておられぬ人なのであるが、人生の無常を深く悟り澄ました人はこんなに冷静なふうでいられるのであらうとوراやましく、御自身の及びがたさをお覚えになるのであるが、「我妹子わぎもこが来ては寄り添ふ真木柱まきばしらも睦まじやゆかりと思へば」という歌のように、あの人を愛した男であるとお思になるとこの人にさえ愛のお持たれになる兵部卿ひょうぶぎょうの宮であつた。この人とある日は向かい合っていたのかとお思いになると、形見であるというように薫の顔がお見守られになった。いろいろな世間話を申しているうちに、絶対に浮舟のことは言いださぬという態度はお取りしたくないと思ひ、

「私は昔からどんなこともあなた様に申し上げないで、自分だけだ
思っているのがとても苦しいのではございますが、今では知らぬまに

私のような者も大官になっておりますし、ましてあなた様はいろいろとお忙しい身の上でお閑暇ひまなどがありますまいと存じまして、宿直とのいなどをいつでも申し上げて話を聞いていただくようなこともできません。日を過ごしておりますが、こんなことをひとつお聞きください。昔も御承知のあの山里に若死にをしました恋人と同じ血統ちすじの人が意外な所に一人いると聞きました、昔の人の形見にときどき顔を見て慰めにしようと思ったのですが、ちょうど私といたしましては、そんなことをしては、世間からわけもなく悪く批評をされる時だったものですか。昔の寂しい山里へつれて行ってあったのでございます。そして始終は訪ねて行ってやることもない間柄たずになっていましたし、その人も私一人にたよる心もなかったように見えましたが、唯一の妻として

は、そうした不純な心のあることは捨ておけないことですが、愛人としておくぶんには許されなくはないものですから、可憐かれんに見ておりましたが突然亡なくなったのでございます。人生の悲哀がまたしみじみと味わわれまして、寂しい思いをしております。もうそのことはお耳にもどちらからかはいつておりますでしょう」

と言つて、この時になつて泣き出した。薫かおるとしてもこれほど悲しむふうはお見せすまいと自戒していたのであつたが、こぼれ始めてはとどめがたい涙になつた。その様子に別な意味もあるふうなのを宮もお悟りになり、氣の毒に思召したが、素知らぬふうをあそばした。

「御愁傷をお察します。そのことは昨日ちよつと聞いたのでした。御弔問をしたく思いましたが、秘密にしておありになるのだとも聞い

たものですから」

言葉少なにこうお言いになった。長く言うに堪えがたいお気持ちになつておいでになったのである。

「お目にかけましたら興味をお覚えになりますだけの価値のある女性でしたが、それは私の思いますだけでなくあなたの奥様のほうの縁故のある人でしたから、もう顔など知つておいでになったかもしれせん」

などと少しほのめかして薫は、

「御病氣中はうるさい世の中のことなどをお耳に入れましては御安静をお妨げすることになつてもよろしくございません。よく御養生をなさいますし」

と申して辞し去った。非常に悲しがつておいでになった、故人を哀れな存在とは見たが、現在の帝王と后きさきがあれほど御大切にあそばされる皇子で、御容貌ようぼうといい、学才と申して今の世に並ぶ人もない方で、すぐれた夫人たちをお持ちになりながら、あの人に心をお傾け尽くしになり、修法、読経どきよう、祭り、祓はらいとその道々で御恢復かいふくのことに騒ぎ立っているのも、ただあの人の死の悲しみによつてのことではないか、自分も今日の身になっていて、帝みかどの御女を妻おんむすめにしながら、可憐かれんなあの人を思つたことは第一の妻に劣らなかつたではないか、まして死んでしまった今の悲しみはどうしようもないほどに思われる、見苦しい、こんなふうにはほかから見られまいと忍んでいるのであるがと薰は思い乱れながら「人非木石皆有情、不如不逢傾城色」と口ずさんで寢室に

ひとほくせきにあらずみなうじやみかづけいせいのにろにあはざるに

はいつた。葬儀なども簡単に済ませたことを宮も飽き足らず思召した
ことであろうと哀れに思われて、母の身分がよろしくなくて、異父の
弟などが幾人も立ち合つてなどとあとに言われることを避けて急いで
したのであるがと不愉快に薰は思った。くわしい様子も聞かないで
いることも物足らず思われ、自身で宇治へ行つてみたいと思うのであ
るが、喪の家へそのまま忌の明けるまで籠こもっているのも自分としては
ばかられる、行くだけ行つてすぐに帰るのも心苦しいことであると
思いもだえていた。

月が変わつて、今日は宇治へ行つてみようと思ふ日の夕方の気
持ちはまた寂しく、橘たちばなの香もいろいろな連想れんそうを起こさせてなつかしい
時に、杜鵑ほととぎすが二声ほど鳴いて通つた。「亡なき人の宿に通はばととき

すかけて音^ねにのみなくと告げなん」などと古歌を口にしたままではまだ物足らず思われ、二条の院へ兵部卿の宮の来ておいでになる日であつたから、橘の枝を折らせて、歌をつけて差し上げた。

忍^ねび音や君も泣くらんかひもなきしでのたをさに心通はば

宮は中の君の顔の浮舟によく似たのに心を慰めて、二人で庭をながめておいでになる時であつた。言外に意味のあるような歌であると宮は御覧になり、

橘^{にほ}の匂ふあたりはほととぎす心してこそ鳴くべかりけれ

なんだかかかりあいのあるようなことが言われますね。

とお返事をあそばした。宮と浮舟の姫君の関係もまたその人の死も何に基因するかも今は皆わかってしまった中の君は、姉の女王によおうも妹の姫君も物思いがもとで皆若死にをしたあとに、自分だけが残っているのは感情の鈍いにぶ質であるからであろうか、それといってもいつまでも生きていられることかと心細く思った。宮も隠してお置きになつても、いずれは知れてしまうことであるのに、隔てを置いたままであるのは苦しいことであると思召して、浮舟との関係を少しは取り繕つて夫人へお話しになった。

「だれであるのかをあなたがどこまでも隠そうとしたのが恨めしかつたために反発はんぱつ的にそんなことにまで進んでしまったのですよ」

など、泣きも笑いもしながらお語りになる相手が、恋人の姉である
ことにお慰みになるところも多かった。形式が簡単でなく、ちよつと
お身体からだの悪いことのあつても騒ぎがはなはだしくなり、見舞いに集ま
る人も多く、父の大臣、その息子たちと絶え間なしに病床に付き添つ
ているようなところと変わり、二条の院においでになることは氣樂で
なつかしい気分を十分お得になられることであつたのである。浮舟の
死んだことはまだ夢のようにばかりと思われになり、どうして急にそ
うなつたかという不審がお解けにならぬため、例の内記たちをお召し
になり、右近を呼びにおつかわしになった。

母の常陸夫人も宇治川の音を聞くと自身も引き入れられるような悲
しみが続くために困って京へ歸って行つた。念仏の役を勤める僧だけ

が頼もしい人のようなかな家と見たが、内記がはいって行つても、人が来るとすぐに外を見まわりに来るような宿直とのいの侍もない。今はこうであるのに、あの最後の時にだけはこんな者たちが妨げて宮をお入れしなかつたときときかた方らは思い出して悲しんだ。それほどまでに悲しみにお溺おぼれにならずともよいではないかと、常は非難がましく宮をお思いしている人たちであるが、ここへ来て見ると、あの無理をして通つておいでになつたあの場合、その場合が思い出され、宮にお抱かれして船に乗つた方の美しかったことなどを思い出すと、だれも心強くなつておられる者はなくなつて皆泣いていた。

右近が出て来て非常に泣くのももつともなことと思われた。宮がこういう思召しで迎えのために自分らをおつかわしになつたということ

を語ると、今になって他の女房たちからも怪しいことと言われ、思われするであろうことが苦しく考えられて、

「まいりましてもよくおわかりいただきますほどな細かなお話がまだできます自信がございません。お四十九日が済みましたあとで、ちよつと外へまいると申すような体裁を作りましても不自然でないころになりました時、私はもう生きても居られない気はいたしますものの、まだ生き延びておられましたなら、お召しがございませんでも伺いまして、ほんとうに夢のようでございました悲しいお話も申し上げたいと思います」

と言い、今は動きそうにもない。内記も泣いて、

「私は何も細かい御関係のことまでは知らないのですし、事情もわか

りませんが、宮様がどんなに深い愛をお持ちになりましたかというところでだけは存じ上げていたものですから、あなたがたとも急いで御懇意にならずとも、しまいには御主人としてお仕えする方についておいでになる方と思ひまして呑氣のんきにして来たのですが、お亡かくれになってはじめてあなたがたにもいろいろと御心配をお掛けしたことが相済まぬ、あなた様はよくお尽くしく下さいましたと感謝の念でいっぱいになりなりました」

などと言っていた。

「車も宮御自身でお指図さしずになってお持たせになったのですから、あき車をまた引かせては帰れません。もう一人の方でも来てくださいませんか」

と内記が言うので、右近は侍従を呼び、

「あなたが伺ってください、私の代わりに」

と言った。

「あなたでさえもお話を申し上げる自信が持てないのに、私にどうしてもそれができましよう。それにしましても忌中の者がお邸へやしきまいったりすることは縁起の悪いことではございませんか」

「御病気のためにいろいろなふうに御謹慎をなさらねばならなくなっているらしいですが、そんなこともかまっておいでになれない御様子なのです。また考えてみますと、あれほどお愛しになった方のためには宮様御自身が忌におこもりになってもよろしいわけなのですからね、もう忌の残りが幾日もあるのではないのですから、ぜひお一人だ

けは来てください」

内記がこう責めるので、侍従も宮の御様子をおなつかしく思い出している心から、もう一度お目にかかりうる機会などというものはありえないことであるから、こうした時にでもと願うようになり、まいることにした。黒い服ながら引き繕^とつて着た姿はきれいであった。裳^もは現在では主人のいない家であつたから喪の色のも作らなかつたため、淡紫^{うすむらさき}のを持たせて車に乗った。姫君がおいでになつたなら、宮にこうして迎えられておいでになつたであろう、自分はその時にお付きして行こうと心にきめていたのであつたがと思ひ出すのは悲しかった。途中をずっと泣きながら侍従は二条の院へまいった。

兵部卿の宮は侍従の来たしらせをお受けになつても身にしむように

お思われになった。夫人へは恥ずかしくてお話しにはならなかったのである。宮は寢殿のほうへおいでになり、その廊のほうへ車を着けさせて侍従を下ろさせになった。

浮舟うきふねのことをくわしく聞こうとあそばすと、そのずっと前から煩悶はんもんをし続けていたこと、その前夜にひどく泣いたことなどを言い、

「怪しいほどお口数の少ない方で、内気でいらっしやいましたから、遺言らしいことは何もなさいませんでした。夢にも自殺などという強いことのおできになるとは思われませんでした」

などと侍従が話すことによって、宮はいつそうお悲しみが深くなり、命数が尽きて死んだということよりも、どんなに物思いを多くして恐ろしい川へなど身を投げたのであらうと御想像あそばすのが苦し

く、その時に見つけることができたとどめえたならばと、沸きかえるような心持ちにおなりになるのであるが、今ではすべてむなしいことであつた。

「あのお手紙を始末してお焼きになりました時に、なぜ私たちの頭が働かなかつたのでございましょう」

と侍従は言ったりして、夜の明けるまで語つても語り足りないというふうであつた。寺からもらった経巻へ書いて母君の返事にした歌のことなどもお話しした。侍従などは何とも宮の思つておいでにならなかつた女であつたが、哀れに思召すために、

「自分の所にいるがよい。あちらにいる奥さんもあの人には他人でなかつたのだから」

と仰せられたが、

「そうしてお仕えさせていただきましては何も何も悲しいことになりましょう。ともかくもお忌を済ませましてから、どうとも身の振り方を考えます」

侍従はこう申し上げた。

「また来るがいい」

こんな人とすらも別れるのを悲しく宮は思召した。浮舟のために作らせておありになった櫛くしの箱一具、衣裳箱いしやう一つを宮は贈り物にあそばした。その人のためにお設けになった物は多かったのであるが、これはただ内記に託しておこしらえになったただけのものであった。

突然山莊を出て来て、こうした戴いたき物をして帰っては他の人々が何

と思うであろう、少し困ったことであると侍従は思ったのであるが、御辞退のできることもなかった。

宇治へ帰った侍従は右近と二人でひそかに櫛の箱と衣箱の衣裳をつれづれなままにこまごまと見た。はなやかなきんしゅう錦繡の服と精巧な作の箱、その中の小箱を見ながらも二人は非常に泣いた。喪にこもっている自分たちはこれをどう隠しておればいいかということにも苦心を要した。

薫も思い余って宇治へ行くことにした。途中からもう昔のことがいろいろと胸へ集まってきて、どんな因縁で八の宮の所へ自分は行き始めたのであろう、二人の女王に失恋をして、父宮から子とも認められなかった人にまで縁が生じ、この一家との結ばれによって物思いばかり

りを自分はし続ける、尊い悟りをお持ちになった方へ仏の導きで近づき、未来の世界での交わりを約していながら、女王に心を引かれ始めて、信仰をよそにした報いを受けるのであらうと、こんなことも思われた。

大將は右近を前に呼んで話そうとしたが、悲しみが先に立ちはおかしい質問もできない。

「もう忌の残りの日も少なくなったのだから済んでからと思ったが、どうしても待ちきれないものがあつて来た。どんな病状でにわかにおの方は死ぬようになられたか」

と問われ、右近は弁の尼なども姫君の遺骸のなくなっていたことは^け気どっているのであるから、隠してもしまいは薫の耳にはいること

に違いない、かえってことを蔽^{おお}おうとして誤解を招くことになつては
姫君が氣の毒である、あの不始末を処理するためにはいろいろな嘘^{うそ}も
言われたのであるが、このまじめな人に対しては、今までも逢^あつた時
にはこうも弁解しああも言つてと考へていたことは皆忘れてしまい、
嘘は恐ろしくなり眞實の話をした。これは薫の想像にものぼらなかつ
たことであつたから、驚きのためにしばらくはものも言われなかつ
た。それを眞實とは信じがたい、普通の人が煩悶^{はんもん}をしたり、悲しんだ
りする場合にも多くは口に言わずおおようにしていた人にどうしてそ
んな恐ろしいことが思い立たれるか、そのほかの事實を自分へこう取
り繕つて言うのではなからうかと、いつそう心の乱れてゆくのを覚え
る薫であつたが、しかしあの人をお隠しになつたようでもなく宮が悲

しんでおいでになったことは著しいことであつたし、この家の様子も、死が作り事であれば自然に気配けはいが違っているはずであるのに、自分の来たのを見ると人は上から下まで集まって来て泣き騒いでいるではないかと考え、

「奥さんといっしょに行ってしまった人があるか、もつと詳細にその時のことを言ってくれ。私に誠意がないからほかへ行ってしまう氣にあの人になつたとは思われない。何もなくてにわかになんかできるか、私は信じることができない」

と言つた。予期した詰問であると右近は恐れた。

「もうおわかりになつていらつしやいましたでしょうが、宮様の姫君としてお育てられになつたのではございませんでしたから、心でいろ

いろ御苦勞をなされた方でございます。それが寂しいお住まいをなさることになりましたからはいつかともなく物思いをなさいますことになりましたのですが、たまさかにもせよあなた様がおいでになります時のお喜びで過去の不幸も御自身で慰めになりながらも始終お逢いあそばすことができますような日の出現を、口に出してはおっしゃいませんでしたが始終そればかり待っておいでになったふうでございました。ようやくそのお望みのかないます御様子と私どもにもうかがえますことがございまして、うれしく存じて御用意にかかっておりまして、常陸守の奥様もやっとお喜びになることができた御様子でお仕度したのことなどをあちらからもういろいろとお世話をしていらつしやいましたところになりました、姫君には御合点のゆかぬような御消息がござ

いましたそうで、それと同時に宿直とのいをいたしている侍たちが女房の中に品行の修まらぬ者があるとか京のお邸やしきで申されたとか言いだしまして、ものの理解のない田舎いなかの人が無遠慮なことをよく言ってまいったりすることになりますし、あなた様から久しくおたよりもございませんことなどから、自分は薄命なものだと小さい時から知っていたのを、人並みの幸福を得させようと心を砕いておいでになる母君が、また今になって自分が世間の笑われものになったりしては、どんなに力を落とすだろうと、こんなお心持ちをそれとなく私どもへ始終言ってお歎きになりました。それ以外に何があるかと考えましても、何も思ひ当たることはございません。鬼が隠すことがありましても片端からいは残すでしょうのに」

と言つて右近の泣く様子は、見ていても堪えられなくなるほどのものであったから、宮との例の恋愛の事実は無根でないらしいと悟った時から少し紛れていた薫の悲しみがよみがえり、せきあえぬふうになつた人も泣いた。

「自分の身が自分の思つているとおりにはできず、晴れがましい身の上になつてしまったのだから、逢つて慰めたいという心の起こる時も、そのうち近くへ呼び寄せ、家の妻にも不安を覚えさせないようにしてから、長い将来を幸福にしたいと、自分をおさえてきたのを、誠意がなかったように思われたのも、かえつてあの人に二心があつたからではないかという気がされる。もうそんなことは言わずにおこうと思つたが、だれも聞いていないのだから事実を私に聞かせてくれ、そ

れは兵部卿の宮様のことだ。ひょうぶぎやういつごろからのことだったのか、恋愛の技術には長じておいでになる方だから、女の心をよくお引きつけになつて、始終お逢いできぬ歎きがこうさせておしまいになり、命もなくしたのではないかと思う。隠さずに真実を言ってくれ。自分に少しの欺瞞ぎまんもないことを言つてほしい」

と薫かおるの言うのを聞いて、確かなことを皆知つておしまいになつたようである、この方もお氣の毒であるし、故人もおかわいそうであると右近は思つた。

「情けないことをお聞きあそばしたものでございますね。右近がおそばにおらぬ時といつてはございませんでしたのに」

と言ひ、右近はしばらく黙つていたが、

「そんなこともお聞きになつていらつしやいましょうが、お姉様の二条の院の奥様の所へ行つておいでになりました時、思いがけずそのお部屋^{へや}へ宮様がお見えになつたことがあるのでございますが、失礼なことも皆でいろいろ申し上げましてお立ち去りを願つたのでございました。実はそれを恐ろしいことに思召して、あの三条の仮屋^{かりや}のような所にしばらくお住いになつたのでございます。それから決してお在^{あり}処^かをお知らせしますまいと警戒をいたしておりましたのに、どういたしましたことか^{ことし}今年^{ことし}の二月ごろからおたよりがまいるようになりました。お手紙はたびたびまいったのですが、丁寧にお頼みになることもございませんでしたのを、もつたいたないことで、そうしてお置きになりますことはかえつて悪い結果を生みますと私などがお勧めいたしま

したので、一度か二度はお返事をあそばしたことがあったようでございます。それ以外のことは何もございません」

こう言つた。そう言うべきことである、しいてそれ以上を聞くのもこの人がかわいそうであると薫は思い、じつとひと所をながめながら、宮をお愛したのであるが、自分をもおろそかには思えなかつたらしい、迷い迷つて死におもむいたのである、自分がこうした寂しい場所へさえ置かなんだならば、世の中の波にもまれることはあつても、自殺までもすることはなかつたであらうと思うと、この川があつたがために悲しい結末を見ることになつたのであると、宇治の流れを憎く思う薫であつた。恋しい人の縁で荒い山路を往復することをやまみち ゆきかえり
何とも思わなかつた薫は、この時になつて宇治という名を聞くことさ

えいやであるように思った。宮の夫人があゝの姫君のことを初めに戯れて人型と名づけて言つたのも、川へ流れてゆく前兆を作つたものであつたかと思うと、何にもせよ自分の軽率さから死なせたという責任も感じられた。母の現在の身分が身分であつたから、葬式なども簡単にしてしまつたのであらうと不快に思つたこともくわしく聞いたことによつて、そうした想像をしたことが氣の毒になり、母としてはどんなに悲しがっていることであらう、あの身分の母の子としてはりっぱ過ぎた姫君であつたのを、陰のことは知らずに自分との縁により、姫君が煩悶をしたこともあつたとして悲しんでいることかもしれないなどと同情がされるのであつた。穢れけがというものはこの家にはないはずであるが、供の人たちへの手前もあつて家の上へは上がらず車のしじ榻という

台を腰掛けにして妻戸の前で今まで薫は右近と語っていたのである。これを長く続けているのも見苦しく思われて茂った木の下こけの苔の上を座にしてしばらく休んでいた。もう山荘に来てみることも心を悲しくするばかりであろうから、今後来ることはないであろうと思い、その辺を見まわして、

われもまたうきふるさとをあれはてばたれ宿り木の蔭かげをしのばん

こんな歌を口ずさんだ。

以前の阿闍梨あじやりも今は律師になっていた。その人と呼び寄せて浮舟うきふねの法事さしずのことを大将は指図さしずしていた。念仏の僧の数を増させることなど

も命じたのであつた。自殺者の罪の重いことを考えてその滅罪の方法も大将はとりたい、七日七日に経巻と仏像の供養をすることなども言い置いて、暗くなつたのに歸つて行く時、あの人がいたならば今夜は歸ることではないのであると悲しかった。尼君の所へ人をやつたが、

「私と申すものが凶事のしるしのように思われまして、心をめいらせしておりますこのごろは、以前よりもいっそうばけてしまひまして、うつ伏しに寝^{やす}んだままでおります」

と言ひ、話しに出てこなかつたので、しいて逢おうとは言わなかつた。

途^{みち}すがら薫は浮舟を早く京へ迎えなかつたことの後悔ばかりを覚えて、水の音の聞こえてくる間は心が騒いでしかたがなかつた。遺骸だ

けでも捜してやることをしなかったと残念でならないのであった。どんなふうになつてどこの海の底の貝殻かいがらに混じつてしまつたかと思うと遣瀬やるせなく悲しいのであった。

常陸夫人は京に産をする娘のあるために潔斎潔斎ときびしく言われる家へはいれないで、他のところにいて悲しみの休む間ひまもないのである、その娘もまたどうなることかと不安だったがそれは安産した。穢けがれがあつてはこれも見に行くことができないのである、そのほかの子供たちのことも皆忘れたようになり、茫然ぼうぜんとしている時に右大将からそつと使いが来て手紙をもらつた。ぼけている心にもそれはうれしかったが、また悲しくもなつた。

思いがけぬ不幸にあい、まずあなたに悲しみを訴えたいと思つたの

ですが、心が落ち着かず、また涙に目も暗くなる気がして実行はできませんでした。ましてあなたはどんなに悲しんでおいでになることだろう。涙に沈んでおいでになることだろうと思いますと、手紙をあげてもお読みにはなれまいと遠慮も申しているうちに日がずんずんとたちました。人生の常なさがことごとくに形となってわれらをおびやかします。この悲しみにも堪える力の許されて、私が生きていましたなら、故人の縁のあつた者として何かのことは御相談もしてください。

などどこまやかな心で書かれたものだった。使いにはあの大蔵大輔たゆうが来たのである。

「すべてを気長に考えていたものですから、かなり月日はたっていて

も、必ずしも私を誠意のある婿とは思ってくださらなかったでしょう。しかし今は何につけてもあなたの御一家のことは念頭に置いて忘れますまい。またそのように内々信じてくださって、お力になるものと思っていてください。小さい息子さんたちもあるそうですが、仕官をおさせになる場合には必ず後援をするつもりで私はいます」

と、言葉でも伝えさせた。ひどく忌む性質の穢れでもないからと言って、夫人はしいて大輔を座敷へ招じた。そして返事を泣く泣く書いていた。

悲しい思いをいたしますだけでは死なれませぬ命を歎いております私へ、もったいないおいたわりの言葉などのただけですとは夢想もいたしませんでした。故人がおりました間、心細い様子は見てお

りながら、それは私自身の無力からであると存じまして、ただおそれ多い行く末かけてのあたたかいお言葉一つを頼みにいたしておりましたが、死なせましてあとではあの地との因縁が悲しくばかり思われてなりません。いろいろと将来のことであれしい仰せを賜わりましたことで、命の延びることにもなりまして、今しばらく生きてまいれますことになりましたら、その息子たちのことであなた様のお力におすがり申し上げる日もあろうと思えますにつけても、あの人の亡くなってありませぬ現在の悲しみに目も涙で暗くなるばかりでございまして、感謝の思いも書き尽くすことができませんをお許しください。

などと書いた。使いへの贈り物に普通の品を出すべき場合ではない

し、またそれだけでは不満足な感じをあとでみずから覚えさせられることであろうからと思い、貴重品として将来は故人の姫君に与えようと考えていた高級な斑犀はんさいの石帯せきたいとすぐれた太刀たちなどを袋に入れ、車へ使いが乗る時いっしょに積ませた。

「これは故人の志でございます」

と言わせて贈ったのであった。

帰った使いは贈られた品を大将に見せると、

「よけいなことをするものだね」

と薫は言った。使いの伝えた言葉は、

「奥さんが自身でお逢いになりました、非常に悲しい御様子で、泣く泣くいろいろの話をなさいました。若い息子たちのことまでも御親切

におっしゃっていただきましたことはもったいないことで、うれしく存じますが、しかしながらまたあまりに恐縮な当方の身分でございますから、人には何のためにとは絶対に知らせぬようにいたしまして、できのよろしい子供たちだけを皆お邸^{やしき}へ差し上げることにしましょうということでした」

その言葉どおりに奇妙な親戚関係^{しんせき}と人には見られることであろうが、宮中へそうした地方官が娘を差し上げないこともないのであるし、また素質がよくて帝王がそれをお愛しになることになってもお譏^{そし}りする者はないはずである、人臣である人たちはまして世間から無視されている階級の家の娘を妻にしている類も多いのである、常陸守^{ひたちのかみ}の娘であつたと人が言つても自分の恋愛の径路が悪いものであれば指弾

もされようが、そんなことではないのであるからはばかり必要もない、一人の大事な娘を不幸に死なせた母親を、その子ののこした縁故から一家に名誉の及ぶことで慰めるほどの好意はぜひとも自分の見せてやらねばならないのが道であると薫は思った。

母の隠れ家へは常陸守が来て立ちながら話すのであったが、娘に土産のあつたおりもおりにだれかの触穢しよくえを言い立てて引きこもっていることなどで腹だたしいふうに言っていた。去年の夏以来姫君がどこにいるかをありのままには夫人の言つてなかった常陸守であつたから、寂しい生活をしていることであろうと思ひもし、言ひもしていたのを大将に京へ迎え入れられたあとで、名誉な結婚をしたと知らせようと夫人が思っていたうちに浮舟は死んでしまったのであつたから、隠

しておくのもむだなことであると夫人は思い、薫と結婚をして宇治に住まわせられていたこと、そして病んで死んだ話を泣く泣く語るのであった。薫からもらった手紙も出して見せると、貴人を崇拜する田舎^{いなか}風な性質になつてゐる守は驚きもし臆^{おく}しもしながら繰り返し繰り返し薫の手紙を読んでいる。

「幸福で名誉な地位を得ていて死んだ方だ。自分も大将の家人^{けにん}の数にはしていただいている者で、お邸へはまいることがあつても近くお使いになることもなかった。とても気高^{けだか}い殿様なのだ。息子たちのことを言つてくださったのは非常にあれらのために頼もしいことだ」

こう言つて喜ぶのを見ても、まして姫君が大将夫人として生きていたならばと思わないではいられない夫人は、臥^ふしまろんで泣いてい

た。守もこの時になつてはじめて泣いた。しかしながら浮舟が生きて
いるとすれば、かえつて異父弟の世話を引き受けようなどと薫はしな
かったことであろうと思われる。自身の過失から常陸夫人の愛女を死
なせたのがかわいそうで、せめて慰めを与えることだけはしたいと思
う心から、他の譏^{そし}りがあるうとも深く氣にとめまいという氣になつて
いるのである。

薫は四十九日の法事の用意をさせながらも実際はどうあの人はなつ
たのであろう、まだ一点の疑いは残されていると思うのであるが、仏
への供養をすることは人の生死にかかわらず罪になることではないか
らと思ひ、ひそかに宇治の律師の寺で行なわせることにしているのだ
であつた。六十人の僧に出す布施の用意もいかめしく薫はさせた。母夫

人も法会には来ていて、式をはなやかにする寄進などをした。兵部卿の宮からは右近の手もとへ銀の壺^{つぼ}へ黄金の貨幣を詰めたのをお送りになった。人目に立つほどの派手^{はで}なことはあそばせなかったのである。ただ右近が志として供物にしたのを、事情を知らぬ人たちはどうしてそんなことをしたかと思議がった。薫のほうからは家司^{けいし}の中でも親しく思われる人たちを幾人もよこしてあつた。在世中はだれもその存在を知らなんだ夫人の法事を、薫がこんなにまで丁寧^{ていねい}に営むことによつて、どんな婦人であつたのかと驚いて思つてみる人たちも多かったが、常陸守が来ていて、はばかりもなく法会^{ほうえ}の主人顔に事を扱つてゐるのをいぶかしくだれも見た。少将の子の生まれたあとの祝いを、どんなに派手に行なおうかと腐心して、家の中にない物は少なく、支^し

那^な、朝鮮の珍奇な織り物などをどうしてどう使おうと驕^{おご}った考えを持っていた守ではあったが、それは趣味の洗練されない人のことであるから、美しい結果は上がらなかった。それに比べてこの法会の場内の莊嚴をきわめたものになっているのを見て、生きていたならば、自分らと同等の階級に置かれる運命の人でなかったのであったと守は悟った。兵部卿の宮の夫人も誦^{ずきよう}經の寄付をし、七僧への供膳^{きようぜん}の物を贈った。

今になつて隠れた妻のあつたことを帝^{みかど}もお聞きになり、そうした人を深く愛していたのであろうが、女^{にょ}二^にの宮^{みや}への遠慮から宇治などへ隠しておいたのであろう、そして死なせたのは氣の毒であると思召した。

浮舟の死のために若い二人の貴人の心の中はいつまでも悲しくて、正しくない情炎の盛んに立ちのぼっていたところにそのことがあつたため、ことに宮のお歎きは非常なものであつたが、元来が多情な御性質であつたから、慰めになるかと恋の遊戯もお試みになるようなこともようやくあるようになった。薫は故人ののこした身内の者の世話などを熱心にしてやりながらも、恋しさを忘れなく思っていた。

ちゅうぐう

おじ

中宮もまだそのまま叔父おじの宮の喪のために六条院においでになるのであつたが、二の宮はそのあいた式部卿にお移りになった。お身柄が一段重々しくおなりになったために、始終母宮の所へおいでになることもできぬことになったが、兵部卿ひょうぶきょうの宮は寂しく悲しいままによくおいでになつては姉君いっぼんの一品の宮の御殿を慰め所にあそばした。すぐれ

た美貌びぼうであらせられる姫宮をよく御覧になれぬことを物足らぬことにしておいでになるのであった。右大將が多数の女房の中で深い交際をしている小宰相こさいしやうという人は容貌ようぼうなどもきれいであった。価値の高い女として中宮も愛しておいでになった。琴の爪音つまおとも琵琶びわの撥音ばちおとも人よりはすぐれていて、手紙を書いてもまた人と話しをしても洗練されたところの見える人であった。兵部卿の宮も長くこの人に恋を持っておいでになるのであって、例の上手じょうずに説き伏せようとお試しになるのであるが、誘惑をされてだれも陥るような御関係を作りたくないという強い態度を変えないのを、薫かおるはおもしろい人であると思つて好意が持たれるのである。このごろの薫が物思いにとらわれているのも知つていて、黙っていることができぬ気もして手紙を書いて送つた。

哀れ知る心は人におくれねど数ならぬ身に消えつつぞ経る^ふ

72

私が代わって死んでおあげすればよかったように思われます。

と感じのよい色の紙に書かれてあった。身にしむような夕方時のしめっぽい気持ちをよく察して訪ね^{たず}の文を送った心持ちを薫は感謝せずにはおられなかった。

つれなしとこら世を見るうき身だに人の知るまで歎きやはする

これを返歌にした。

答礼のつもりで、

「寂しい時の御慰問のお手紙はことにありがたく思われました」

と言いに小宰相の家を薫は訪ねて行^{たず}った。貴人らしい重々しさが十分に備わり、こんなふう^にに中宮の女房の自宅へなど、今までは一度も行^つったことのない薫が訪ねて来た所としては貧弱な邸^{やしき}であった。局^{つぼね}などと言われる狭い短い板の間の戸口に寄つて薫の坐^ざしているのを片腹痛いことに思う小宰相であつたが、さすがにあまりに卑下もせず感じのよいほどに話し相手をした。失つた人よりもこの人のほうに才識のひらめきがあるではないか、なぜ女房などに出たのであろう、自分の妻の一人として持つていてもよかった人であつたのにと薫は思つてゐた。しかしながら友情以上に進んでいこうとするふうを少しも薫は見せていなかった。

蓮はすの花の盛りのころに中宮は法華ほけ經の八講を行なわせられた。六条

院のため、紫夫人のため、などと、故人になられた尊親のために経卷や仏像の供養をあそばされ、いかめしく尊い法会ほうえであつた。第五卷の講ぜられる日などは御陪觀する価値の十分にあるものであつたから、あちらこちらの女の手蔓てづるを頼んで参入して拝見する人も多かつた。五日めの朝の講座が終わつて仏前の飾りが取り払われ、室内の裝飾を改めるために、北側の座敷などへも皆人がはいつて、旧態にかえそうとする騒ぎのために、西の廊の座敷のほうへ一品の姫宮は行つておいでになつた。日々の多くの講義に聞き疲れて女房たちも皆部屋へやへ上がつていて、お居間に侍している者の少ない夕方に、薫の大將は衣服を改めて、今日退出する僧の一人に必ず言つておく用で釣殿つりどののほうへ行つ

てみたが、もう僧たちは退散したあとで、だれもいなかったから、池の見えるほうへ行つてしばらく休息したあとで、人影も少なくなつてゐるのを見て、この人の女の友人である小宰相などのために、隔てを仮に几帳きちようなどとして休息所のできているのはここらであろうか、人の衣擦きぬずれの音がすると思ひ、内廊下の襖からかみ子の細くあいた所から、静かに中をのぞいて見ると、平生女房級の人の部屋へやになつてゐる時などとは違ひ、晴れ晴れしく室内の装飾ができていて、幾つも立ち違ひに置かれた几帳はかえつて、その間から向こうが見通されてあらわなのであつた。氷を何かの蓋ふたの上に置いて、それを割ろうとする人が大騒ぎしてゐる。大人おとなの女房が三人ほど、それと童女がいた。大人は唐衣からぎぬ、童女は衿かざこみも上に着ずくつろいだ姿になつていたから、宮などの御座所

になつてゐるものとも見えないのに、白い羅うすものを着て、手の上に氷の小
さい一切れを置き、騒いでゐる人たちを少し微笑をしながらながめて
おいでになる方のお顔が、言葉では言い現あらわわせぬほどにお美しかつ
た。非常に暑い日であつたから、多いお髪ぐしを苦しく思召すのか肩から
こちら側へ少し寄せて斜めになびかせておいでになる美しさはたとえ
るものもないお姿であつた。多くの美人を今まで見てきたが、それら
に比べられようとは思われない高貴な美であつた。御前にゐる人は皆
土のような顔をしたものばかりであるとも思われるのであつたが、氣
を静めて見ると、黄の涼絹すずしの単衣ひとえに淡紫うすむらさきの裳もをつけて扇を使つてゐる
人などは少し氣品があり、女らしく思われたが、そうした人にとって
氷は取り扱いにくそうに見えた。

「そのままにして、御覧だけなさいましょ」

ほうばい

あいきよう

と朋輩に言つて笑つた声に愛嬌があつた。声を聞いた時に薫は、はじめてその人が友人の小宰相であることを知つた。とどめた人のあつたにもかかわらず氷を割ってしまった人々は、手ごとに一つずつの塊かたまりを持ち、頭の髪の上に載せたり、胸に当てたり見苦しいことをする人もあるらしかつた。小宰相は自身の分を紙に包み、宮へもそのようにして差し上げると、美しいお手をお出しになつて、その紙で掌てをおぬぐいになつた。

「もう私は持たない、雫しずくがめんどうだから」

と、お言ひになる声をほのかに聞くことのできたのが薫のかぎりもない喜びになつた。まだごくお小さい時に、自分も無心にお見上げし

て、美しい幼女でおありになると思った。それ以後は絶対にこの宮を
拝見する機会を持たなかったのであるが、なんという神か仏かがこん
なところを自分の目に見せてくれたのであろうと思い、また過去の経
験にあるように、こうした隙見すきみがもとで長い物思いを作らせられたと
同じく、自分を苦しくさせるための神仏の計らいであらうかとも思わ
れて、落ち着かぬ心で見つめていた。ここの対の北側の座敷に涼んで
いた下級の女房の一人が、この襖子からかみは急な用を思いついてあけたまま
で出て来たのを、この時分に思い出して、人に気づかれては叱しかられる
ことであらうとあわてて帰って来た。襖子に寄り添った直衣姿のうしの男を
見て、だれであらうと胸を騒がせながら、自分の姿のあらわに見られ
ることなどは忘れて、廊下をまっすぐに急いで来るのであった。自分

はすぐにここから離れて行つてだれであるとも知られまい、好色男らしく思われることであるからと思い、すばやく薫は隠れてしまった。その女房はたいへんなことになった、自分はお几帳きちようなども外から見えるほどの隙すきをあけて来たではないか、左大臣家の公達きんだちなのであらう、他家の人がこんな所へまで来るはずはないのである、これが問題になればだれが襖ふすま子こをあけたかと必ず言われるであらう、あの人の着ていたのは単衣ひとえも袴はかまも涼絹すずしであつたから、音がたたないで内側の人は早く気づかなかつたのであらうと苦しんでいた。

薫は漸く僧に近い心になりかかつた時に、宇治の宮の姫君たちによつて煩惱ぼんのうを作り始め、またこれからは一品いっぽんの宮みやのために物思ものいを作つくる人になる自分なのであらう、その二十はたちのころに出家をしていたな

ら、今ごろは深い山の生活にも馴^なれてしまい、こうした乱れ心をいただくことはなかったであろうと思ひ続けられるのも苦しかった。なぜあの方を長い間見たいと願った自分なのであろう、何のかいがあろう、苦しいもだえを得るだけであつたのにと思つた。

翌朝起きた薫は夫人の女二の宮の美しいお姿をながめて、必ずしもこれ以上の御美貌^{びぼう}であつたのではあるまいと心を満ち足りたようにしていしなから、また、少しも似ておいでにならない、超人間的にまであの方は気品よくはなやかで、言いようもない美しさであつた。あるいは思ひなしかもしれぬ、その場合がことさらに人の美を輝かせるものだつたかもしれぬと薫は思ひ、

「非常に暑い。もつと薄いお召し物を宮様にお着せ申せ。女は平生と

違った服装をしていることなどのあるのが美しい感じを与えるものだからね。あちらへ行つて大式だいにに、薄物の単衣ひとえを縫つて来るように命じるがいい」

と言いだした。侍している女房たちは宮のお美しさにより多く異彩の添うのを楽しんでの言葉ととつて喜んでいた。いつものように一人で念誦ねんずをする室へやのほうへ薫は行つていて、昼ごろに来てみると、命じておいた夫人の宮のお服が縫い上がつて几帳きちようにかけられてあつた。

「どうしてこれをお着にならぬのですか、人がたくさん見ている時に肌はだの透く物を着るのは他をないがしろにすることにもあたりますが、今ならいいでしょう」

と薫は言つて、手ずからお着せしていた。宮のお袴はかまも昨日の方と同

じ紅であつた。お髪ぐしの多さ、その裾すそのすばらしさなどは劣つてもお見えにならぬのであるが、美にも幾つの級があるものか女二の宮が昨日の方に似ておいでになつたとは思われなかつた。氷を取り寄せて女房たちに薫は割らせ、その一塊ひとかたまりを取つて宮にお持たせしたりしながら心では自身の稚態がおかしかつた。絵に描かいて恋人の代わりにながめる人もないのではない、ましてこれは代わりとして見るのにかげ離れた人ではないはずであると思うのであるが、昨日こんなにしてあの中に自分もいっしょに混じつていて、満足のできるほどあの方をながめることができたのであつたなと思うと、心ともなく歎息の聲が発せられた。

「一品の宮さんへお手紙をおあげになることがありますか」

「御所にいましたころ、お上^{かみ}がそうおっしゃったものですから、差し上げたこともありましたが、ずいぶん長く御交渉はなくなっています」

「人臣の妻におなりになったからといって、あちらからお手紙をくださらなくなつたのでしようが、悲観させられますね。そのうち私から中宮へあなたが恨んでおいでになると申し上げよう」

と薫は言う。

「そんなこと、お恨みなど私はしているものでございますか。いやでございます」

「身分が悪くなつたからといって軽蔑^{けいべつ}をなさるらしいから、こちらからは御遠慮して消息を差し上げないとそんなふうに言いましょう」

こんなことを言つてその日は暮らし、翌日になつて大將は中宮の御殿へまいつた。例の兵部卿ひょうぶきやうの宮も来ておいでになつた。丁子ちやうじの香と色の染しんだ羅うすものの上に、濃い直衣のうしを着ておいでになる感じは美しかった。一品いっぽんの宮みやのお姿にも劣らず、白く清らかな皮膚の色で、以前より少しお瘦やせになつたのがなおさらお美しく見せた。女宮によく似ておいでになるということから、またおさえている恋しさがわき上がるのを、あるまじいことであると思い、静めようとするのもあの日の前には知らぬ苦しみであつた。兵部卿の宮は絵をたくさんに持つて来ておいでになつたが、そのうちの幾つかを女房に姫宮のほうへ持たせておあげになり、御自身もあちらへおいでになつた。

薫は後の宮のお近くへ寄つて行き、御八講の尊かつたことを言い、

六条院のことも少しお話し申し上げながら、残った絵を拝見している時に、

「私の所に来ておいでになります宮さんが、宮廷から離れて屈託した気持ちになっておられますのをお気の毒だと見ております。一品の宮様のお消息などをいただけませんことを人妻に降^{くだ}ったことで愛をお捨てになったように思つてしまないふうなのでございますが、こうしたものなどをときどき見せてあげてくださいとはいかがでしょう。私がその使いはいたします。私どものほうのも持つてまいります」

と中宮へ申し上げると、

「まあそんなことで御交際をおやめになるものですか。同じ御所の中

におられたころは、近いものですからときどき手紙が通ったのでしようが、遠く離れ離れにおなりになった時からお手紙が途絶え始めて、そのままになったことなのでしょう。そのうち私からお勧めしてお書きになるようにしますよ。そちらからだってお手紙をお送りになればいいのにね」

と、宮は仰せられた。

「そちらからは出過ぎたように思われておできにならないのです。う。初めから御交渉のなかった方にいたしましても、私と宮様がたとの縁の続きに愛しておあげくださることになるのがうれしい成り行きなのですが、まして以前から御交際のあった間柄でおありになるのですから、私の所へ来られましたあとでお捨てになるのは、あの宮さん

にとつておかawaiiそんなことです」

などと申しているのを、恋が言わせることと中宮はお悟りにならなかった。

薫は中宮のお居間を辞して、先夜の好意のある女友人にも逢おう、あの思い出の廊の座敷を心の慰めに見て行こうと思い、縁側伝いに西に向いて歩いて行つた。御簾みすの中にいる女房たちはそれだけのことにすら心づかいのされる薫の大将であつた。渡殿わたどののほうには左大臣の息子らがいて、女房たちと話し合っている様子であつたから、この人は妻戸のところになすわつて、

「始終この院へはまいっている私ですが、こちらの宮様の御殿へ伺うことができないでいますと、自然老人めいた気持ちになるようになって

たのですが、これからはそうしてまいと決心してまいったのですよ。馴なれない人間の恰好かつこうは滑稽こっけいなものに若い人たちからは見られることでしょう」

甥おいの公子たちのほうを見ながらこう言っていた。

「ただ今からお習いになりましたなら新鮮なお若さが拝見されることでしょう」

などと戯れて言う女房からも怪しいまでの高雅な感じの受け取られるのであった。何をおもな話題にするというのでもなく、世間話を平生よりもしんみりと話し込んで薫かおるはいた。

姫宮は中宮ちゅうぐうの御殿のほうへおいでになった。後の宮が、

「大將があちらへ行きましたか」

とお尋ねになると、一品の宮のお供をしてこちらへ来た大納言の君が、

「小宰相に話があると言つていらつしやいました」

と申した。

「まじめな人であつて、さすがに女の友だちにも心の惹ひかれるところがあつてむだ話もして行きたいのだろうがね。才能のない人が相手をしては恥ずかしい。女の価値がすぐ見破られるからね。小宰相ならま
ず安心だけれど」

こんなことをお言いになる宮は、御弟なのであるが、薫に周囲を觀察されることを恥ずかしく思召し、女房らも飽き足らず思われるところを見せぬようにしてほしいと思召すのである。

「あの人をだれよりも御ひいきになさいまして、部屋のほうへも寄ってお行きになることがよくあるようでございます。しんみりとお話をしておいでになることもございまして夜がふけてお帰りになることはありまして恋愛関係と申すようなことはなさそうに思われます。あの人兵部卿の宮様の御性情には反感を持っておりまして、お返辞すらよくいたさないようでございますのはもったいないことでございます」

と言い、大納言の君が笑うと、中宮もお笑いになって、
「あの宮の多情な本質が直感できるのだからいいね。どうしてあの方の悪癖を直させたらいいだろう、恥ずかしいと私は思う。だれも皆そう思っているだろうね」

こうお語りになった。

「妙な話を私は聞いたのでございます。あの大将さんのお亡しなくになり
ました人は兵部卿の宮様の二条の院の奥様のお妹さんだったそうでござ
います。前常陸守の妻はその方の叔母おばであるとも、母であるとも申
しますのはどういう理由わけであるのかよく存じません。その大將の愛人
の所へそつと兵部卿の宮様も通つてお行きになったということござ
いまして、大將さんがそれをお聞きになりましたのか、にわかに宇治
から京へ迎えようとなすつて、監視の人などをきびしくお付けになり
ましたところに、宮様はまたおいでになったのでございますが、家の中
へおはいりになることができませんで、危険なことでございますが、
お馬のまま外に立っておいでになり、それなり帰つておしまいに

なつたということでございまして、女も宮様をお慕いしていたので
しょうか、にわかに行くえがわからなくなりましたのを、川へ身を投
げたのであろうと、乳母うばというような者が泣き騒いで言っていたそう
でございます」

大納言の君はこんな話を申し上げた。中宮がお驚きになつたことは
言うまでもない。

「だれがまあそんな噂話うわさばなしをしていたの、ほんとうにかわいそうな話で
はないか。そんな出来事はすぐ噂になるものなのに、それでもなし、
また大將もそんなふうには話さずに、人生の悲哀を強調して話すだけ
で、また宇治の宮さんの一族が皆短命で死ぬのは悲しいことだとは
言っていたけれども」

「ほんとうでございますか、どうでございますか、しもぎまの者は確かでないこともほんとうらしく話にいたすものですが、その宇治の山莊におりました下童しもわらわがついこのごろ宰相の実家のほうへ来まして、確かなことのように申していたそうでございます。そうした死に方をなさいましたことを世間へ知らすまい、自殺などという思いきったことをした人だと言わすまいと皆が隠すことに骨を折ったそうでございませう。それで大将さんもくわしいお話をあそばさなかったのではないでしようか」

「その話をまたほかへ行つてするなと宰相からお言わせよ。そうした問題で宮は自身をだいなしにしておしまになることにもなり、世間からも軽蔑けいべつされることにおなりになるだろう」

こうお言いになつて、中宮は非常に御心配をあそばす御様子であつた。

それからまもなく一品の宮から女二の宮へお手紙が来た。御手跡のおみごとであるのを見ることのできたことが薫にはうれしくて、期待にはずれないごりっぱさである、もつと早くこれが拝見できる方法に講ずべきであつたなどと思つた。多くの美しい絵などを中宮からもお送りになつた。お礼として薫からもそれにまさつた絵を集めて差し上げることにした。小説の芹川^{せりかわ}の大將が女一の宮を恋して秋の日の夕方に思い侘^わびて家から出て行くところを描^かいた絵はよく自身の心持ちが写されているように思われる薫であつた。その人のように成功すべき恋でないのが残念であつた。

荻の葉に露吹き結ぶ秋風も夕べぞわきて身にはしみにける

と書き添えたい気がするのであるが、そうしたことは氣^けぶりにも知れたならばどんなことの言われるかしれぬ世の中であるからと、思うことすらも洩^もらしがたい恋に心を悩ませ、はては宇治の大姫君さえ生きていてくれたならば、その人を妻とすることができていたのであれば、どんな人を見ても心の動揺することなどはなかったはずである。現代の帝王の御女^{おんむすめ}を賜わるといっても、自分はお受けをしなかったはずである、また自分がそれほど愛している妻があるとわかっておいでになって姫宮をお嫁^{とつ}がせになることもなからう、何といっても自分の心の混乱し始めたのは宇治の橋姫のせいであると、こんなことを思っ

てゆくうちに薫の心はまた二条の院の女王の上に走って、恋しくも恨めしくもなり、取り返されぬ昔を愚かしいまでに残念に思った。もうどうすることもできないことなのであると、それを心に片づけたあとでは、また自殺をしてしまった浮舟うきふねが、思想的に幼稚でよこしまな情熱に逢あつてたちまち動かされていった軽率さを認めながらも、さすがに煩悶を多くしていたこと、そのころに自分の気持ちの変わったことで、自責の念から歎きに沈んでいた様子を宇治で聞いて知ったことも思い出され、妻というような厳肅な意味の相手ではなく、心安く可憐かれんな愛人としておきたいと思うのにはふさわしくかわいい女性であったと考えられ、もう宮に不快の念を持つまい、女をも恨むまい、ただ自分の非常識から若い愛人をああした場所へ置き放しにしていたのがあ

やまちの原因だったのであると、こんなふうに物思いの末にはあきらめをつけることにもなった。

静かな落ち着いた薰さえこんなふうに恋愛については身体からだにもさわるほどの苦しみも時には味わうのであるから、まして浮舟をお失いになった兵部卿の宮は心を慰めかねておいでになって、その人の形見の人として悲しみを語り合う人さえもおありでなく、対の夫人だけは哀れな人であつたと言つてくれはするものの、姉妹きょうだいとして交わつていた期間はわずかなことであつたから、深い悲しみは覚えているはずもない、また宮としては思召すままに恋しい悲しいとお言いになることも、夫人に向かつてのことであるからお心のとがめられることであるために、あの山荘の侍従をお呼び寄せになった。女房たちは皆ちりぢ

りに去ってしまったあとに、乳母めのとと右近、侍従だけは故人が最も親しんだ人たちであつたから、喪の家から離れず、一方は親子であつて、侍従は関係のない間柄ではあるが、いっしょに山莊へ残つて暮らしていたのであつたが、荒々しい川音を聞くのも、そのうち京の邸やしきへ姫君の迎えられて行く日を楽しみにして辛抱しんぼうされたものの、情けなく、氣味悪くばかり思われて、京のちよつとした知り合いの家へこのごろは侍従だけが移つて来ていた。宮がお捜させになつてこのまま二条の院の女房になるようにと仰せになるのであつたが、夫人はともかくも、他の女房たちから浮舟の姫君と宮とのあるまじい情交の起こつていたことで何かと非難がましいことを言われるであらうことが思われお受けをしなかつた。中宮の女房になつてお仕えしたいとそれとなく内記

に言つてもらうと、

「それはよい。そして自分が陰で勤めよくなるようにしてやろう」

と言う宮のお返辞であつた。侍従は姫君を失つた心細さも慰むかと思ひ、手蔓てづるを求めて目的の宮仕えをする身になつた。見た目のきれいな下級女房であると人も認めて、侍従は悪くも言われていなかった。

大将もよくまいるのを陰かげで見るたびに昔が思われる物哀れな心になつた。貴族の姫君たちだけのお仕えしている場所だと聞いていて、そうした上の女房たちの顔をこのごろ皆見知るようになってから考えても、浮舟の姫君ほどの美貌の人はないようであつた。

今年の春お薨かくれになつた式部卿しきぶきょうの宮の姫君を、継母ままははの夫人が愛しないで、自身の兄うまのかみの右馬頭で平凡な男が恋をしているのに、姫君をかわ

いそうとも思わずに与えようとしていることを中宮へある人から申し上げると、

「気の毒な、宮様がたいへん大事になすった女王^{によおう}さんを、そんな廃^{すた}り者にしてしまおうとするなどとは」

と憐^{あわれ}んで仰せられた。

「たよりない心細い思いをしているあなたにそうしたあたたかい同情を寄せてくださるのだから、中宮へお仕えしたら」

と、兄の侍従も宮仕えを勧めた女王を、このごろ中宮は手もとへ侍女にお迎えになった。女^{によいち}一の宮のお相手として置くのによい貴女^{きじよ}と思召して、特別な御待遇を賜わって侍しているのであったが、お仕えする身であるかぎり、やはり宮の君などと言われ、唐衣^{からぎぬ}までは着^もぬが裳

だけはつけて勤めているのは哀れなことであつた。ひょうぶきやう兵部卿の宮は、この人だけは恋しい故人に似た顔をしているであろう。式部卿の宮と八の宮は御兄弟なのであるからなどと、例の多情なお心は、昔の人の恋しいために、新たな好奇心もお起こしになることがやまず、いつとなく宮の君を恋の対象としてお考えになるようになった。

人生は味気ないとこの女王についても薫は思うのであつた。まだ昨今というほどのことではないか、東宮の後宮へお入れになろうと父宮がお思いになり、自分へも娶めとらせようとされた姫君である、栄えた人のたちまち衰えてゆくを見ては、水へはいつてしまった人はそれを見ぬだけ賢明であつたかもしれぬなどと薫は思い、他の女房に対するよりもこの女王に好意を寄せていた。

ちゅうぐう

すまい

六条院に中宮のおいでになることは、宮中のお住居よりも広く住みよくだれも思い、時々まいるだけで始終は侍していぬ人までも皆上がって来ていて、はるばると多く続いた対、廊、渡殿の座敷は女房で満ちていた。左大臣は父君の院の御在世当時にも劣らず中宮のためにあらゆる物をととのえて奉仕していた。末広がりになった一族であったから、かえって昔よりも六条院のはなやかさはまさってさえ見えた。兵部卿の宮が今までのようなふうでおありになれば、この集まった女性の中のある人々とこの幾月かのうちにはどんな問題を起こしておいでになるかもしれないのであるが、すっかりと冷静におなりになり、人から見れば少し性質がお変わりになったかと思われたのであるが、近ごろになってまた宮の君にお心を惹かれ、御本性どおりにつき

まとおいでになった。

秋冷の日になって中宮は宮中へ歸ろうとあそばされるのであったが、秋の盛りの紅葉もみじの季にここで逢えないのは残り惜しいことであると若い女房たちは言い、だれも皆実家にいず、このごろは六条院にまわっていた。水を愛し、月の景色けしきを喜んで音楽の催しなども常にあつた。兵部卿の宮は常よりもはなやかな六条院を愛して、この空気の中心のようになっておいでになるのである。朝夕にお顔を見ていながらも、いつも今咲きそめた花に逢あう気のされる兵部卿の宮であつた。薫はそれほど入り立っていないのであるために、若い中宮の女房たちは、この人が来れば緊張してしまうのであつた。ちょうどこの二人の若い貴人の同時に中宮のお居間に来合わせている時であつたが、宇治

にいた侍従は物蔭からのぞいて、どちらにもせよこのりっぱな方々の一人に愛されて生きておいでになればよかった。恵まれておいでになった幸運をわれから捨てておしまいになった姫君であると思い、他の人には宇治の山荘のこと、薫の愛人であつた姫君のことなどは知つたふうには言つてないことであつたから心一つに残念がつていた。兵部卿の宮が御所のお話などを細かく母宮へしかかつておいでにもなつたため、薫がお居間を出て行こうとするのを見、自分を見つけさすまい、一年の忌の来るのも済まさずに宇治を去つたのは故人へ情のないことであるとは思われたくないと思い、侍従はすぐに隠れてしまつた。

東の廊の座敷のあいた戸口に女房たちがおおぜいいてひそひそと話

などをしてゐる所へ薫は行き、

「私をあなたがたは親しい者として見てくださるでしょうか、女にだって私ほど安心してつきあえるものではありませんよ。それでも男ですから、あなたがたのまだ聞いていない新しい話も時にはお聞かせすることができなのですよ。おいおい私の存在価値がわかつていただけるだろうという自信がそれでもできましたからうれしく思っています」

こんな戯れを言いかけた。だれも晴れがましく思い、返辞をしにくく思っている中に、弁の君という少し年輩の女が、

「お親しみくださる縁故のない者がかえって私のように恥じて引つ込んでいないことになります。ものは皆合理的にばかりなってゆくもの

ではございませんですね。だれの家のだれの子でございますからと申しておつきあいを願うわけのものでもありませんけれど、羞恥心しゅうちを取り忘れたようにお相手に出ました者はそれだけの御挨拶あいさつをいたしておきませんではと存じますから」

と言った。

「羞恥心も何も用のない相手だと私の見られましたのは残念ですね」

こんなことを薫かおるは言いながら室へやの中を見ると、唐衣からぎぬは肩からはずし

て横へ押しやり、くつろいだふうになって手習いなどを今までしてい

た人たちらしい。硯すずりの蓋ふたに短く摘んだ草花などが置かれてあるのはこ

の人らがもてあそんだものらしい。ある人は几帳の立ててある後ろへ隠れ、ある人は向こうを向き、ある者は押しあけられてある戸に姿の

隠れるようにしてすわっているの、頭の形だけが美しく見えた。すべて感じよく思つて薫は硯を引き寄せ、

をみなへし
女郎花乱るる野べにまじるとも露のあだ名をわれにかけめや

こう書いて、

「安心していらつしやればいいのに」

と言い、すぐ近くの襖子からかみのほうを向いている人に見せると、相手は身動きもせず、しかもおおように早く、

花といへば名こそあだなれをみなへしなべての露に乱れやはする

と書いた。手跡は、少ない文字であるが気品の見える感じよいものであるのを、薫は何という女房であろうと思って見ていた。今から中宮のお居間へこの戸口を通って行こうとして、薫の来たために出るにも出られずなつた人らしく思われた。弁の君は、

「わざと老人じみたことをお言いになつては反感が起こるものですよ」

と言ひ、

「旅寝してなほ試みよをみなへし盛りの色に移り移らず

そのあとであなたをどんな性質で、お堅いともそうでないとも、き

めましよう」

とも言う。

宿貸さば一夜は寝なんおほかたの花に移らぬ心なりとも

薫が言ったのである。

「私を侮辱あそばすのでございますね。自分のことではございませんよ。一般的に抗議を申し上げただけでございます」

と弁は言う。こんなふうに戯れ言も薫は長くは言っていないらしく見えるのを若い女房たちは飽き足らず思っていた。

「思いやりのないことをしましたね。あなたの道をあげましょう。と

りわけて私に顔をお見せにならない態度には理由のあることでしよう」

と言ひ、薫の立つて行くのを見て、だれもが弁のようにはしゃぐ者のように思われぬかと氣にする人もあつた。東の高欄によりかかつて、くさむら叢の中に夕明りを待つて咲きそめる花のある植え込みを薫はながめていた。何も皆身にしむように思われる薫は、なかんづくはらわたをたつはこれあきのでん「就中断腸是秋天」と低い声で口ずさんでいた。先刻の人らしい衣きぬ擦れの音がして、中央の室からへや抜けてあちらへ行つた。兵部卿の宮がそこへ歩いておいでになつて、

「ここから今あちらへ行つたのはだれか」

と他の者に尋ねておいでになつた。

「一品いっぽんの宮様みやのほうの中將さんでございます」

と答える声も御簾みすの中でした。おもしろくないことである、だれであらうとかりそめにもせよ好奇心の起こった人が、すぐにだれそれであるとなぜしをして聞かれるではないか、とその女がかわいそうに思われ、また兵部卿の宮には皆よくお馴なれしていて、隠なすところもなくなっているのがなんとなくうらやましい気もする薫であつた。自由に接近してお行きになることができ、上手じょうずな技巧で誘惑をあそばされては女も負けることになるのであろう、自分にはそんなことができず、こちらの人たちとは、縁の遠いうとうしいものになっているのが残念である。侍している人の中で、どうかして近ごろ兵部卿の宮がはげしく恋をしておいでになる人を自分のものにして、あの時に自分が苦

しんだような思いを宮にもお味わわせしたい。聡明な女であれば自分のほうを愛するはずであるとは思われるが、こちらの考えどおりな心を持っているかどうかは頼みになるものでないと思われるにつけても、二条の院の女王が、宮のああした御放縦な恋愛生活を飽き足らず見て、自分の愛を頼むようになり、それを恋にまでなってはならぬ、世間の批評がうるさいと思いながら友情だけはいつも捨てぬのは珍しく聡明な態度で、自分としてはうれしいかぎりである、そんなすぐれた女性はこれとおおぜいの若い女房たちの中に一人でもあるであろうか、深く接近して見ぬせないように思われる、物思いに寝ざめがちな慰めに恋愛の遊戯も少し習いたいと思うが、もう今は似合わしくないと思つた。例の氷を割られた日の西の渡殿へ、その日のよう

にふらふらと薫が来てしまったのも不思議であつた。姫宮は夜だけ母宮の御殿のほうへおいでになるため、もうお留守になつていて、女房たちだけで月を見ると言い、渡殿に打ち解けて集まっていた。十三絃げんの琴を懐しい音で弾くのが聞こえた。人々の思いもよらぬこんな時に薫が出て来て、

「なぜ人を懊惱おうのうさせるように琴など鳴らしていらつしやるのですか。

いうせんくみみにきくもなほきたためんみすいかばかりおもしろからん
(遊仙窟。耳聞猶氣絶、眼見若為憐)」

こう言うのに驚いたはずであるが、少し上げた御簾みすをおろしなどもせず、一人は身を起こして、

「崔季珪さいきけいのようなお兄様がいらつしやるかしら」

と言う。その声は中将の君といわれていた女であつた。

「私は宮様の母方の叔父^{おじ}なのですよ。

（遊仙窟^{かんぱせはをぢはんあんじんにたりぐわいせいなれ}。容貌似舅潘安仁外

甥^{はなれ}、氣調如兄崔季珪小妹^{もうとなればなり}）」

こんな冗談^{じょうだん}を言つたあとで、

「いつものように中宮様のほうへ行つておしまいになつたのでしょうね、宮様はお里住まいの間は何をしていらつしやるのですか」

思わずこんな問いを薰は発することになった。

「どこにいらつしやいまして、別にこれという変わったことはあそばしません。ただいつもこんなふうでお暮らしになつていらつしやるばかり」

聞いていて美しいお身の上であると思うことで知らず知らず歎息の声の洩^もれて出たのを、怪しむ人があるかもしれぬと思う紛らわしに、

女房たちが前へ出した和琴^{わごん}を、調子もそのままでかき鳴らす薫であつた。律の調べは秋の季によく合うと言われるものであつたから、氣も入れて弾かぬ琴の音であるが、みずから感じの悪いものとは思われぬものの、長くも弾いていなかったのを、熱心に聞きいつていた人たちはかえつて残り多さも出て苦しんだ。自分の母宮もこの姫宮に劣る御身分ではない、ただ后腹というわずかな違いがあつただけで朱雀院^{すざく}の帝^{みかど}の御待遇も、当帝^{いっぽん}の一品の宮を尊重あそばすのに変わりはなかつたにもかかわらず、この宮をめぐる雰囲^{ふんいき}氣とそれとに違つたもののあるのは不思議である。明石^{あかし}の女のもたらしたものはことごとく高華なものであつたとこんなことを思う続きに薫は運命が自分を置いた所はすぐれた所であるに違いない、まして女二の宮とともに一品の宮までも

妻に得ていたならばどれほど輝かしい運命であつたであらうと思つたのは無理なことと言わねばならない。

宮の君はこの西の対の一所を自室に賜わつて住んでいた。若い女房たちが何人もいる気配けはいがそこにして皆月夜の庭の景色けしきを見ていた。そうであつたあの人も浮舟らと同じ桐壺きりつばの帝みかどの御孫であつたと薫は思ひ出して、

「式部卿の宮様に私を愛していただいたものなのだから」

と独言ひとりごとを言いその座敷の前へ行つてみた。美しい姿の童女が略服に

なつて、二、三人縁側へ出ていたが、薫を見て晴れがましいというように中へ隠れてしまった。これが普通の所の情景であると今見て来た廊の座敷と比べて薫は思った。南の隅すみの間のそばで咳せき払いをすると、

少年のいったような女房が出て来た。

「人知れず好意を持っている者ですなどと申せば、それはだれも言うことだとお聞きになるでしょうし、またそうした若い人たちの口真似まねをすることも私にはできません。それよりも言葉でない実質的な御用に立つことはないかと捜しております」

と言うと、その女は女王にも取り次がず、賢がつて、

「思いがけぬお身の上におなりあそばしましたことにつきましても、宮様がどんなにいろいろなお望みを姫君の将来にかけておいでになりましたかと思われまして、悲しゅうございます。いつも御親切に仰せくださいまして、お宮仕えにおいでになりました御非難のお言葉なども、ごもつともだと女王様によおうは言っておいでになることでございます

よ」

こんなことを言う。並み並みの家の娘などのように聞こえることもはばからず言う女であるといやな気のした薫は、

「もとから血族であるためというようなことでなしに、好意を持つ男として、何かの御用をお命じくだすったらうれしいだろうと思います。うとうとしくお取り次ぎでお話などをしてくださるだけでは私も尽くしたいことがお尽くしできない」

と言った。そうであつたというふう^{たかさご}に女房たちは思い、姫君を引き動かすばかりにしたはずであつたから、

「松も昔の（たれをかも知る人にせん高砂の）と申すような孤立のたよりなさの思われます私を、血族の者とお認めくださいましておつ

しやってくださいますあなたは頼もしい方に思われます」

取り次ぎの者に言うというふうにもなしに、こういう声は若々しく愛嬌あいぎょうがあつて優しい味があつた。ただの女房としてであればよい感じに受け取れたであろうが、今の身になつては、すぐに人に逢つてこれだけの言葉もみずから発しなければならぬものと思うようになつたかと考えるとこの人を飽き足らぬものに薰かほは思われた。容貌ようぼうも必ず艶えんな人であらうと思ひ、見たい心も覺えたが、この人がまた宮のお心を乱す原因になることであらうと思われ、絶対の信用の持てない人は相手にしたくない氣にもなつた。この人こそは最上の家庭に生まれ、大事がられて育つた、典型的な姫君というのに不足のない人で、他に幾いくたり人もない身の上だったのであるが、自分として頼もしい女性と思われ

ぬのはどうしたことであろう、僧のような父宮に育てられ、都を離れた山里で大人おとなになった人が姉女王にもせよ中の君にもせよ、皆完全な貴女きじよになっていたではないか、このはかない性情の人、軽々しい人と今の心からは軽侮の念で見られる人も、こうしたわずかな接触で覚えさせた感じは悪いものでなかった、と薫は八の宮の姫君たちのことばかりがなつかしまれるのであった。

宇治の姫君たちとはどれもこれも恨めしい結果に終わったのであったとつくづくと思いつづけていた夕方に、はかない姿でかげろう蜻蛉とんぼの飛びちがうのを見て、

ありと見て手にはとられず見ればまた行くへもしらず消えしかげ

ろふ

「あはれともうしともいはじかげろふのあるかなきかに消ゆる世なれば」と例のように独言ひとりごとを言っていた。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
